

竹村 章（たけむら・あきら）

1、プロフィール

歌人。鳴海要吉の口語歌運動に共鳴、加わる。仲間5人と歌誌「鳴子」を出す。要吉主宰「新緑」「短歌文学」川崎陸奥男の「出帆旗」などに発表。戦後「風車」を編集発行。

<生没>

1913(大正2)年9月6日～1998(平成10)年5月5日

<代表作>

歌集『花岡村』『静かな村』

<青森との関わり>

板柳町に生れる。黒石出身の鳴海要吉の口語歌運動を实践。眼疾に苦しみながらも口語短歌の詩性追求に励む。

2、作家解説

本名は竹浪昌四郎。旧制弘前中学卒業後上京。東京で眼を患い帰郷。この間昭和7年鳴海要吉の新短歌運動(口語歌運動)に加わる。要吉主宰の歌誌「新緑」のち「短歌文学」に発表。昭和10年から川崎陸奥男主宰の「出帆旗」に作品発表。

昭和6年仲間等と鳴子社を結成。新短歌への第1歩を踏み出している。

青森県の新短歌壇の先駆的存在である。警察による思想・文学活動の弾圧を受けながらも創作意欲を衰えさせることなく継続させた。

眼の病気で帰郷後代用教員となる。朝陽、林崎、藤崎、女ヶ沢(女鹿沢)小学校に勤める。この女鹿沢小(花岡村)にいた4年間は、昭和17年出帆の第1歌集『花岡村』に結実する。作者の対象への視点、心の据え方がよく表れている歌集で、児童、底辺の人びと、虫といった小さなもの、弱い立場のものを率直に詠み、

口語体が生きている。石川啄木の歌の平明さ、親しみやすさに通じるものがある。

戦時中の弾圧で一時歌作を中断したが、昭和 31 年「風車」を編集発行する。

失明の危機を乗り越えて、昭和 54 年歌集『静かな村』出帆。交友のあった平井信作が序を寄せ、画家常田健が絵を担当している。

作者の歌碑が浪岡町花岡公園にある。『花岡村』の「転任」最後の歌が刻まれている。——ふり返り高く手を振れば清く明るく空に抱かれていた(歌集では、「空に接してあり」)

3、資料紹介

○『花岡村』

図書

1942(昭和 17)年4月1日

183 mm × 123 mm

昭和7年から9年まで、「新緑」「短歌文学」に発表した歌、作者らが中心となった歌誌「鳴子」に発表したものを「北方の歌」、「出帆旗」に発表した歌を「オルガンの歌」としてまとめている。浦春(要吉)、陸奥男両名の序記載。